

第三回 和辻哲郎文化賞 一般部門 受賞作

中西 進 著『万葉と海彼』（1990年4月20日 角川書店 刊）

中西 進 なかにし すすむ 昭和4年（1929）生まれ。東京都出身。専攻は、古典文学・万葉学。東京大学文学部卒業。東京大学大学院修了。文化功労者。国際日本文化研究センター教授（受賞時）。現在は、奈良県立万葉文化館館長。著書は、『万葉集の比較文学的研究』、『万葉史の研究』、『古事記を読む』、『源氏物語と白楽天』（大佛次郎賞）、『中西進万葉論集』（全8巻）、『中西進著作集』、ほか多数ある。

受賞のことば

大変名誉な、晴れがましい和辻哲郎文化賞を与えてくださった選考委員の先生方ならびに姫路市の皆様に御礼を申し上げます。和辻哲郎と私は直接の関わりはありませんが、後進の一学徒として、和辻の著作は随分たくさん読んできました。特に日本人の精神史の問題に興味を持ってきました。十年以上前に、ある雑誌に精神史のことを書いたときに、編集長が「こういう発想は和辻哲郎が大きな基盤の中から紡ぎだした仕事としてすでに著述しているが、同じような発想が国文学界からでてきたことは喜ばしいことである」と編集後記に書いたことがあります。そのことを嬉しく思いました。和辻哲郎はただ仰ぎ見る、遠い存在でしたが、はるか後の方でその線につながるができるかも知れないと思ったことがありました。計らずも、和辻哲郎文化賞を頂きまして、宿命あるいは学的な義務を感じています。

※授賞式の挨拶から構成。

《選考委員評》

生きる励まし

司馬 遼太郎

『万葉集』の解説はほぼ十三世紀の仙覚でおわったとっていい。

研究は十七世紀末の契沖から始まり、中西進氏の『万葉と海彼』に至る、といたいところである。

この作品は、中西氏ご自身の研究の集大成であるだけでなく、万葉学の新しい発展への出発という感じもする。

戦後、島田謹二氏ら外国文学の研究者らによって比較文学という方法が展開されたが、この時期の若いグループのなかに国文学者の中西進氏がおられたことが、ひとつの奇跡であった。国文学はともすれば同じ仲間の密室のなかに籠りがちになりやすいのだが、比較という方法によって新鮮な酸素が送りこまれることになる。中西氏はそのなかのもっとも精緻な研究者のひとりなのだが、ひょっとすると酸素そのものだったかもしれない。

日本の諸文化や諸思考は、ともすれば孤島のものになりがちになる。

しかし目をこらせば“海彼”だけでなく、“海内”でも、多様な要素がまじっていることに気づく。

げんに、和辻哲郎など、多くの先哲を生んだこの播州の地も、四世紀前後あたりか、渡来系の秦氏によって拓かれ、水田化した国である。また「忠臣蔵」の武林唯七が、講釈などでもっとも日本的な短兵急の性格として造形されつつも、その祖父が明の遺民で、故郷の武林をしのんで武林たけばやしと称したという。この一事を知るだけで、元禄という一見閉鎖的にみえる社会像に風がとおる。

さらにいうと、旧制姫路中学の明治初年における教師に西洋人が多かったことなどを思えば、播州もまた“海彼”にみちているのである。

『万葉集』は、日本文化にとってなにもものにも代えがたい精神文化財だが、そのなかでの詩的発想や修辞、それに用語にいたるまで、中西氏の検証を通してみれば、さまざまな外来種のがやきがある。

この作品は、単なる学問的収穫にとどまらず、私どもが今後生きてゆくうえでの励ましに

なるに相違ない。

万葉研究の大きな成果

陳 舜臣

日本文化の研究は、これからは文化の底流に海外との繋がりをもとめるほうに、重点をおかねばならないとおもう。あれほど日本文化特殊論に立った折口信夫が、戦後、しだいに視座を海外との関連に移したことが思い合わされる。

『万葉と海彼』で、中西進氏も指摘されたように、日本のうた、「和歌」である「万葉の歌ごえ」がおこったのは、百濟滅亡によって、大量の百濟文化人が日本に亡命したのと時期を同じくしている。歌ごえをあげようという、感情や意識を促したのは、異なる文化様式との、多面にわたる接触であったのではないかとおもわれる。

万葉集の時代は、すでに大陸の文物が盛んにはいっていたし、山上憶良のように遣唐使の随員を経験している歌人もいる。とうぜん先進文化圏の影響やその文献の引用もあるはずなのだ。そのままの流入を拒否して、いわば漢語の和語化という過程を通るのが、ぜんたいの流れであったようだ。

ところが、文学の基本をあまりにも「創作」に置く立場に拠りすぎて、これまでこうした傾向を軽くみすぎたきらいがある。また日本文化特殊論を固持する立場から、ことさらに無視することもあった。研究における一種の窪みといえるだろう。中西進氏はその窪みを埋める作業を、この『万葉と海彼』で精力的におこなっている。引用についても、それがなにを意味する行為であったかを、真摯に問いかけている。

中西氏はこれまで万葉集をあらゆる面から吟味してこられたが、本書がおそらくその仕上げではあるまいか。大きな区切りであるというかんじがする。とすれば、中西氏の新しい出発が、本書にすでに胚胎しているはずである。

本年度の和辻哲郎文化賞に、私たち選考委員は全員一致で中西進氏の『万葉と海彼』を推した。激論がなかったのは、やや物足りなかったが、さわやかさがそれを補ってあまりあるものがあつた。中西進氏のこれからの仕事が、さらにひろがり、深まることを期待したい。

梅原 猛

今年の和辻哲郎文化賞は高水準で、予選に残った五作のうち、どれが決まってもおかしくはないという状況であつたが、審議はわりあい簡単で、中西進氏の『万葉と海彼』に決まつた。私は中西氏とあまりに親しいので発言しにくかつたが、司馬氏、陳氏ともに中西氏の長年の愛読者であり、この著も中西氏の多年にわたる万葉研究の総決算の感があるという評があり、もちろん私もそれに賛成した。考えてみれば、和辻哲郎文化賞の第一回は大久保喬樹氏、第二回は宇佐美齊氏であり、いずれもどちらかという新進気鋭の学者である。二人新進の学者が続くと、和辻哲郎文化賞は若い学者が受賞するものであるという印象をもたれやすいが、それは偶然にそうなつたので、別に和辻哲郎文化賞が若い人に与えられるということではない。今回の中西氏の受賞によって和辻哲郎文化賞そのものが重みをもつてくると司馬氏は言われたが、確かに中西氏の受賞は和辻哲郎文化賞そのものの印象を変えるものであろう。

賞決定後、いろいろ三人で雑談したが、不思議なことであるが、日本の国文学者にまともな文章を書ける人は甚だ少ない。作家からみると、どうして国文学者はこんなに悪文が好きなのか不思議に思うけれど、中西氏はそういう国文学者の中できわめて数少ない、よい文章が書ける人であると思う。しかもその知識の幅は群を抜いて広い。この書の特徴は、国文学者には珍しい中国文学に対する深い知識であろう。今や中西進氏は国文学界の第一人者の感があるが、最近、中西学は日本という狭い国土を越えて東アジア、あるいは世界全体へ向こうとしている。そして神話学や民俗学の知識を食欲に吸収しようとしているが、そこからどういう学問が生まれるのか甚だ楽しみである。この本を、私は過去の中西学の一応の総決算として評価するものである。